

	<h2 style="color: blue;">空と稜平</h2> <p style="color: blue; font-weight: bold;">SCE・Net 小林浩之</p>	<p style="font-weight: bold; font-size: 1.2em;">E-123</p> <p>発行日 2020.5.28</p>
---	--	--

空が死んだ。令和元年、12月7日のお昼過ぎのことである。看取ったのは末娘と、その子つまり私の孫である稜平であった。私は妻とともに法要があって、九州に出かけて、不在であった。私も妻も空がだいぶ弱ってきているのは感じていたが出かけるときはそんなことが今起こることは想定もしていなかっただけに、聞いたときは一瞬呆然とした。

空はこの家に来て23年と半年になる。だから、年齢は約23.5歳ということになる。ならば、享年24歳と言える。来た日は1996年の父の日（6月16日）であった。その日、私は当時単身赴任をしていた倉敷に戻ったが、そのあと数時間後に、連れられてきた。空が死んだ時には、九州で法事の最中であり、私は空が我が家に来た時も去っていくときにも立ち合っていないことになる。迎え入れた娘はまだ高校生のころであったが、彼女は終始立ち会ったことになる。3日前、私が九州に出かけるときは、こんなに突然とは感じていかなかったが、老衰死であることに間違いはなかろう。娘によれば、前日には目も朦朧として、歩くのも不自由になり、気は惹かれたが翌日は稜平のお遊戯の発表会ということで、やむなく自分たちの家に戻った。翌日、彼女が遊戯会を終わって、稜平を連れて、再び、我が家に駆け付けてきた時には死に瀕して床に体を横たえていたという。そして間もなく息絶えた。弱った空の給水のため買ってきたスポイトは末期の水のためとなった。その夜は、母子二人で弔った。稜平は、その時、生を受けて3年と11か月となっていた。この春から幼稚園に通いはじめていた。

空は生まれて間もないころ、お向えの、勤め先では私の先輩の息子さんに、野良から拾われてきた。梅雨の入りころであったが、その日は晴天と記録されている。生まれたばかりとは言いながら、気立てもよさそうなメス猫であり、もらってくれと頼まれた時、引き取ることに躊躇はなく、特に準備も心構えもその時備えていたわけではなかったが、我が家で飼うこととなった。黒い猫で、双眼が金色に澄んで、尻尾が長いことが、生涯のチャームポイントとなった。梅雨入りした夏の日の、もう夜ともいえる時刻であった。その猫を引き取って、飼うことを決めたのは、妻と高校生の娘であった。私は、その場にはいなかったから、以上は通告に近く、聞かされた話でもある。多分雑種であろうが、容姿にもそれなりに恵まれ、性格もよくて、頭も良かったから、家族の一員となり、みんなに愛されるのに時間はかからなかった。たとえ素性は不確かでも、そばにおいて、声をかけたいと思わせる猫格を最初から備えていたのである。名前はすぐに空と決められた。本稿の窓に張り付けた写真は2歳に成長した姿である。

猫らしい猫といえる。若いときは、家の外や内を元気に歩き、そして駆け回ったものである。外に出ても、そう遠くには行かなかったが、探しに行ったのは一度や二度の話ではない。私たちの居室は4階建て建物の2階になるが、外に出るときは我が家から段差のある隣の家へ、ベランダの手すりをたどり、そこから地上に降りる。たとえ、ペット禁止のマンションでも、他人に迷惑をかけることがなければ許されるという判例があるというのが、ただひとつの頼りで、ドウダンツツジの下に、隠れた“空”を探すのに這い蹲るようにして、名前を呼ぶのに気はひけたが、隣の家の人とも親しくなった。

稜平は末娘の子供で、私にとってもっとも若い(外)孫になる。2015年の冬の寒い日に生まれた。この子も私たちに、随分と楽しみとくつろぎの時間をくれた。さすがに、80歳に近づこうという爺と婆にはフルタイム付き合う体力もない。しかし、その二人、つまり一人と一匹は会った最初から仲が良かった。最初はまだ歩けない稜平が近寄ると空は鷹揚に迎えた。ベビーチェアの傍らで戸惑いながらも、自慢げに、稜平のそばに座る空の写真がある。稜平誕生後4か月のことである。多少とも意識をもって対峙したのは稜平が生まれて6か月くらいからである。このときはまだ、知力も、体力も、空が勝っていたので、ときにはパンチをとばしたり、躊躇いながら指を噛むこともあった。はじめて噛まれたのもそのころである。驚いて泣きはしたが、そのことで、一匹と一人が離れることはなかった。慌てるのは親だけで、最初のころは慌てて病院につれていくこともあった。やがて、慣れてくる。最初はおそらく知能の程度は同じくらいであったろう。しかし時間とともに。当然の話だが、稜平のほうが勝ってくる。写真にあるように、1歳を過ぎると平気で、触れるようになる。勝つと余裕もでてくる。ラインのビデオコールを使って話すとき、必ず空が画面にでることを要求することになり、幼稚園入園前は、時間も自由に空を見ることが、我が家に来る一つのモチベーションになった。

空が作ったエピソードはいくつもあるが、残念ながら古い話で忘れてしまう。ベランダから野バトを啜って入ってきたことがある。まだ幼いハトだったと思うが、傷ついたハトを野毛の動物園に持って行ったのだが、言われた言葉は“今回はともかく、これからは見てみぬふりをして欲しい”ということであった。

家の中にはあちこちに傷をつくった。障子を破ることはいつもの話で、近くの人でも外から見えたので話題にもなった。襖もしかり、家の柱という柱には背比べの後ではなく、空の足場傷が残った。

猫の20歳以上というのは、もともと化け猫の世界という事で、インターネットでも、人間の年齢に置き換えるといっても、明記は少ないが、106~108歳に相当するというのがある。死ぬ前の数年前になると、ほとんど寝ているような状態になった。食べる時、排尿、排便のときだけ起きているような生活ではあったが、それでも家族には応対もして、お腹がすけば、要求もした。病気はほとんどしなかった。若い時、便秘で数日入院したのと、数年前膀胱炎で、1週間

ほど注射と投薬を受けたくらいである。

だから、超高齢になってもまだ、通常の猫の生活ができる。しかし、どこの動物病院も泊りがけでの預かりはやってくれない。老齢の猫に環境変化のストレスがたえられないという理由である。したがって、家族は空から2日以上は離れられなくなった。

稜平は2歳になり、3歳になった。空は22歳になり23歳となる。年齢差が20というのは変わらないが、いつまでも、この関係は続いた。彼と彼女の関係は写真を並べればすむことではあるが、少し説明を入れたい。

数えて空が24になった時のことである。稜平は3歳で入園する。年少組であった。稜平と空がベランダでにらめっこをするスナップがある。完全に立場が逆になったという状況を示している。

稜平は間もなく大小の便を声に出して言って、独りでできるようになる。一方、空のほうは、時々トイレの外でお漏らしをするようになる。また、食欲もなく弱っていることもあった。稜平は「僕が行ったら、元気になるよ」と、すぐにやってきた。そのせいかどうか、空は囲いの中で、食欲を取り戻し、元気を回復した。空はかつてのように爪とぎをできなくなったので丁寧な爪切りをやってやる必要がある。それでも指を痛めることがあった。痛めた指を触らないようにエリザベスをつけた。その空をいたわりつつ遊んでいる稜平の姿である。ここまでやれるようになった。高齢のせいか毛づくろいが苦手になった空は、ブラッシングをしてもらうのが安堵のひとつになった。これも稜平の時折の手伝いのひとつとなった。

加えて、最後近くは、やむを得ず囲いの中で、暮らすようになる。それでまた落ち着いた。

最後まで耳や目は相当に健全で、人に反応もした。ただ、少し認知症が出たのか、何度も餌を要求した。死ぬ数日前でも餌をねだるときの真剣な眼差しは忘れられない。



黒枠のスナップは死ぬ一月くらい前の最後の雄姿である。これが遺影となった。空は戸塚斎場で私達夫婦と稜平親子の立会いの下茶毘に付され、今は、遺骨は私が陶芸教室で作ったツボに入れられ、遺影とともにリビングの棚の上にある。どこか海か山に撒いてやりたいと話しかけている。

空が死んで3月経った。死ぬまでは空に引っ張り廻されて、気の置けない日々を過ごしたが、この3か月は安堵しながらも寂しく過ごした。家に戻ると空の鳴き声が呼ぶような気もした、そして新型コロナさわざとなった。猫みたいな哺乳類もウイルスのターゲットになるのだろうか。

稜平は元気に4歳となった。しかし、連日幼稚園にも行けず、我が家にも遊びに来てはくれない。

稜平は「空が息を止める直前、空が何か言おう」として口を動かしたと言っていた。彼の人生最初の記憶になりうるのだろうか。

(2020年3月)